# つまやまもと 妻山元遺跡

(国分市中央二丁目2819番地)

### 位置と環境

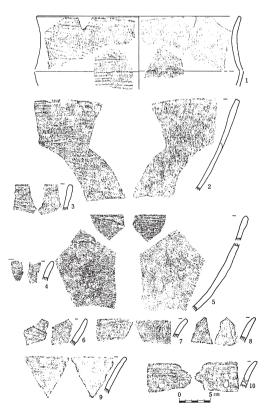
妻山元遺跡は、国分市街地の東北側に位置し、後 背地に姶良カルデラ壁の独立丘陵状の通称城山(隼 人城)を控え、南側は鹿児島湾に面した沖積平野へ と広がる標高12mから10mの微高地上にある。本遺 跡の所在する城山山麓一帯は、縄文・古墳・歴史各 時代の遺跡が数多く分布している。

#### 調査の経緯

国分市教育委員会は、国分市中央二丁目2819番地における市営夕日ヶ丘団地敷地造成工事の最中に現場より土器片出土の連絡を受けた。ただちに、関係機関と協議を行い、昭和59年7月より県教育委員会の協力を得て確認調査が実施され、同年9月より本調査を実施した。

#### 遺構と遺物

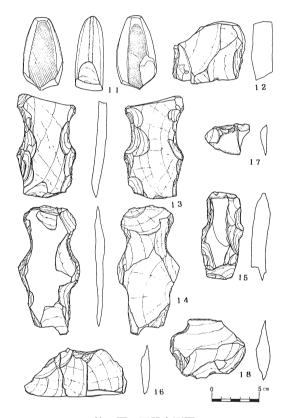
縄文時代の遺物は細片であるが、磨滅されておらず、接合も1区画を中心としてみられ、遺物の垂直分布も傾斜にそって出土し、安定していた。ただ、



第2図 縄文土器実測図



第1図 妻山元遺跡の位置



第3図 石器実測図

一部では,傾斜が強くなるために遺物の上下が出てきた。土器については,深鉢形土器片,なかでも粗製土器が多く出土したが,セット関係を示す明瞭な遺物の出土はなかった(第2図)。

石器については、晩期にみられる打製石斧や磨製石斧・剥片石器が出土している(第3図)。なかでも安山岩を石材とする石皿状の石器は、表面が平坦に研磨されている。縄文後期などに出土する石皿とは形状が異なる平坦面がどのような工程を経て研磨され、どのような目的に使用されたかは不明である。

VI層においては、調査面積と期間の制約をうけ、遺物が集中して出土する地点を拡張して調査することができず、遺構の検出はできなかった。

古墳時代の遺構と遺物については、竪穴住居跡13 軒・土坑13基・溝状遺構7基が検出された(第4・ 5図)。検出された遺構については、攪乱や二次堆 積層により良好な状態とはいえなかった。しかし、 古墳時代初頭に位置づけられる土器がセットで検出 されている。甕形・壺形土器は南九州における弥生 時代後末の様式を引き続けている。在地系土器文化 と外来系土器文化系の要素が加わった高坏も出土している。また、住居跡の床面から製鉄遺構が2か所 検出され、精錬鍛冶炉にみられる椀形滓が出土している。

さらに室町時代以降の石組遺構(第6図)の検出や古銭(洪武通宝)の出土があったが、時期については遺物の数が少なく明確ではない。

#### 特徴

VI層に晩期黒川式土器の包含層が確認され、なかでも刻目突帯出現以前の突帯文土器が出土しており、前半期後葉の編年を解明する好資料である。

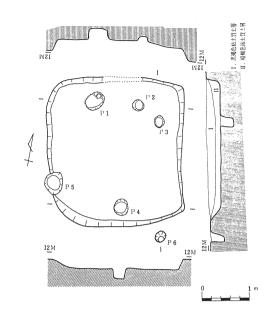
## 遺跡の所在

出土遺物は, 国分市教育委員会に保管されている。

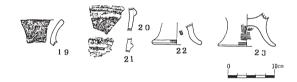
## 参考文献

国分市教育委員会1985「妻山元遺跡」『国分市埋蔵 文化財調査報告書』 1

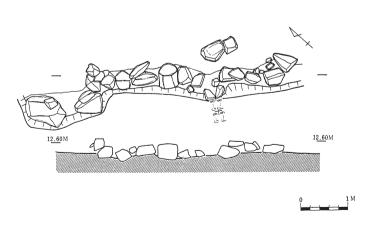
(鈴木順一)



第4図 竪穴住居跡1号 平面図



第5図 竪穴住居跡1号 出土遺物



第6図 石組遺構実測図